

『東方』三〇六号より

明清の通俗文学を読み解く 「恋」の手引書

磯部 祐子(富山大学)

鄭振鐸はかつて、中国の小説研究は、「小説史」と「内容」へのアプローチ以外にはない、と記した^①。鄭振鐸のことに従って従来の小説をめぐる研究を見てみれば、小説史研究については、版本研究、本事研究、或いは、戯曲や語り物との影響研究などによって、個々の小説を小説史全体の中に位置づけることに大きな成果を挙げてきたように思われる。一方、小説本体の研究は、歴史、言語、民俗などの研究成果を活用しながら読みの可能性を広げ、また、小説周辺の資料の援用によって読みに精確さを加え、新たな実りを見せている。

『明代の遊郭事情 風月機関』の著者である小川陽一氏は、小説の内容を、当時の周辺文化との関連から解説していく手法で、中国小説研究史に一石を投じ続けてきた。小説に描かれている内容に実際の生活が如何に反映されているか、という視点からアプローチをしている。小説と善書、小説と占卜、小説と酒令、小説と春薬、小説(戯曲)と肖像画など、その論考は多岐にわたる^②。中国文化の実際をよく理解していないとややもすれば浅薄な理解に終始しがちな小説中の文化現象を、多様なジャンルのテキストを援用して解明しているのである。

小川氏の謎解きに多く用いられるテキストは、通俗的百科全書、すなわち「日用類書」である^③。「日用類書」は、

▶ トップページにもどる

小川陽一著

『明代の遊郭事情 風月機関』

A5判・一六二頁・汲古書院・三、一五〇円



かつて、仁井田隆、酒井忠夫両氏が歴史研究に用いることはあったが、近世小説の解釈に多用したのは小川氏を嚆矢とする。このテキストを援用し、たとえば、『金瓶梅詞話』における「選日」を「日用類書」のそれと比較検討したことによって、「潘金蓮」の悪巧みを読み解くことを可能にした。そして、『金瓶梅詞話』の作者の意図が、「陰険かつ残忍な」金蓮像を作り上げることであったことを明らかにしたのである。

今回出版された『風月機関』も、日用類書に収められていて、その名の通り「色恋(風月)」のからくり(機関)を解き明かした「恋」の手引書である。当時の恋とは、妓楼で繰り広げられるものであった。それゆえ、この手引書には、妓楼での鴛母(おかあさん)のマネージメント手口、妓女(おねえさん)の接待テクニック、嫖客(だんながた)の妓楼プレイのコツが描かれている。しかし、無味乾燥なハウ

▼ 『東方』306号より

一 明清の通俗文学を読み解く「恋」の手引書

▲ 磯部 祐子

ツウものではない。そこからは生き生きとした明清社会の人間関係のあり方が見え隠れし、今日と変わらぬ男と女の駆け引きさえ読み取れるほどである。

元来、中国文学において妓女はいろいろな形で登場した。唐代伝奇小説の「季娃」、「三言二拍」の「杜十娘」から、『金瓶梅』のもと妓女「李嬌兒」などと個性的な女性たちが描かれ、名だたる妓女は、『板橋雜記』などに、その伝記および容姿や詩才に秀でるさまが記されている。

明末から清に流行した才子佳人小説にも、妓女の姿は描かれる。良家の娘でありながら、妓女への零落等、波乱万丈の人生が描かれた『金雲翹伝』のヒロイン王翠翹もその一人である。『金雲翹伝』は、王翠翹の流浪の悲しみを描くことに優れているのみならず、良家の娘に妓女の接客テクニックを教え込む鴛母の描写においても優れている。なるほど、これが世の「だんながた」を落とすに有効な手口か、と教えられる描写も少なくない。ところが、それは『風月機関』にある教えそのものであった。まずはその証拠を掲げてみよう。『金雲翹伝』本文に次のようにある④。

「枕上のテクニクを身につけたら、日用の制度を学びなさい。それには七つあるの。一つ目は「哭」というもの。金持ちの嫖客が暫くいた後に帰ろうとしたら哭いて言うのよ。「あなた、どうして私を置いてきぼりになさるの」と。そして甘えていつまでも離れないの。そうすればどんな固い男も言いなりになるものよ。場なれた客は「また次の客が来るだろ。どうしてそんなに情をこめるのさ。この場限りのことなのにどうして真剣になるのさ」なんて言うはず。そしたら、涙を流してすすり泣きながら言いなさい。「あなたたつて冷たい人。二人の気持ちはびつたりと合い、離れられないの。石だつて抱き合っているうちに熱くなるのよ。

▶ トップページにもどる

お客は多いけれど、あなたに本当に夢中になつてしまったの」と。そして二筋の涙に名残の春を込め、秋波を送れば、心を奪うことができるものよ」

ここでいう「日用の制度」こそ、「日用類書」に収められた『風月機関』である。『風月機関』には、「走・死・哭・嫁・守・抓・打・剪・刺・焼」の十のテクニクが記され、『金雲翹伝』は、そのうち「哭・剪・刺・焼・嫁・走・死」が述べられる。

しかし、この接待テクニクは、当時の文化を知らないとなかなか理解できないものも多い。続いて述べられる「焼」など難解である。「焼」は「だんながた」を繋ぎ止めるための身体を張つてのお芝居である。『金雲翹伝』に曰く、「四つ目は「焼く」というもの。「焼く」とは、苦肉の策。今の若い娘も青年も奸智に長けている。歛心を買ふことと、男の金を吸い取ることだけを考えているけど、真から人の心を動かし繋ぎとめようとしなければ、男の人を自分の中に陥れることはできない。苦肉の策を使つて、二人に誓いを立てさせ、男に移る心無く、女に二心なくさせるの。もし、気が変わったら天が成敗するはず。二人共にお灸をすえ、第一穴は、愛している人の代わりに、もつとも親しい人が灸をする。名づけて、「公心中願(心中を共にする願)」という。二人は胸元を開けて、腹部と腹部をあわせて、胸部と胸部を向かい合わせにして、香灸をすえる。云々」

この「焼」は多様な方法があるようであるが、『風月機関』には、用いる香の種類や灸の方法が具体的に記される。

因みに、この部分は、滝沢馬琴による『金雲翹伝』の翻案『風俗金魚伝』では、「容貌世に優ても手なき娼妓は全盛なし。指切り、髪断り、入痣、七枚起請は事古になり、手事に四十八手あり⑤」と、江戸の郭の事情に置き換えられ、

一方、ベトナムの文学を代表するまでになる阮攸による『金雲翹伝』の翻案『キンヴァンキュウ』では、「外に七文字 内八芸 花柳の遊び飽くるまで 根尽くるまで遊ばすべし^⑥」と訳される。七文字は『金雲翹伝』の七つを指す。或いは、越南の遊郭の事情が中国のそれと類似していたとも考えられよう。

さて、本書に立ち戻れば、本書は明代に出版された『風月機関』『開卷一笑集』巻二「娼妓述」・「娼妓賦」の訳文及びその影印から成る。原本は、本文・原注ともに俗語が多く用され難解な部分が多く、それを補うため、妓女の詩詞曲を集めた『青楼韻語』の注記および『風月機関』と類似する『嫖賭機関』という稀覯本を用いて訳者注を施している。これを加えたことで、『風月機関』本文の読みが確かなものとなり、妓楼を取り巻く文化の実相が分かり、明清の小説戯曲詩詞を読む上で大きな助けとなる。また、末尾に付された「解題に代えて」は、『風月機関』の版本、内容、明清文学とのかかわりなどについての詳細な論稿であり、『風月機関』の意義が容易に理解できる「からくり」になっている。

ただ、原文は難解で、本書には、「よく分からない」の語が散見する。たとえば八頁「莫打鴨、打鴨恐驚鴛鴦飛^⑦」「前船就是後船眼」の箇所もそのひとつである。しかし、『莫打鴨』の句は、『隱居詩話』の中で「宣州知事の呂士隆は好んで官妓を管打つので、妓は皆逃げた。ただ器量と芸に優れた杭州出の妓女が留められ寵愛を受けていた。ある日、郡妓がミスをしてしまった。管打ちを恐れたこの郡妓は、自分の罪を逃れようとは思わないが、杭州出の妓も心安からぬことでしよう、と言った」という文章の後ろに記される句であり、『莫打鴨』とは、「打たないで。（他人が

▶ トップページにもどる

受けた仕打ちを見て）周りの人も恐れる」の謂と解釈できよう。また、「前船就是後船眼」は、馮夢龍『山歌』「雜詠長歌」にも見える俗語で、「盛りのときは幾ばくもなく」前の妓女が蒙る憂き目は、後の妓の鑑となる」のことで、『莫打鴨』も「前船就是後船眼」もほぼ同じ意味と考えられる。

このように、更に解釈可能な部分も幾つかあり、若干の字句の誤り（例えば、一四五頁「謝水」は「謝水順」が正しい）もあるが、本書は難解な原文に訳文と詳細な注記を加えたことで、今後の明清の小説戯曲の研究にとつて、かなり有益な工具書となった。また、著者が兼々言うように「明・清小説は、中国文化の総体として存在する。だからその理解には、中国の文化に関する多面的な知識と関心が求められる。とくに小説の題材や背景となった日常生活に関する知識が不可欠」である。本書はまさに文化知識、風俗史を補う格好の書といえよう。同時に、郭の世界が記された江戸文学を読み解く上でも有用であると思われる。

それにしても、『風月機関』が日用類書に収められていることは、嫖妓が一般的な社会現象であり、一つの文化を形成していたことを意味する。『教坊記』『板橋雜記』などの麗しい妓女がもたらす優美な世界とは異なった、生々しい男と女の「からくり」がこの書には記されている。両性がそれぞれ「欺かれないため」「欺くため」に必要な普通のテクニクも、もしかすると、ここにはあるかもしれない。

【注】

- ①「研究中国小説的方向、不外史^レ的探討与^レ内容^レ的考策」（『鄭振鐸文集』第七卷、人民文学出版社、一九八八）
- ②『日用類書による明清小説の研究』（小川陽一、研文出版、

▼『東方』306号より

四 明清の通俗文学を読み解く「恋」の手引書

▲ 磯部 祐子

一九九五）、『中国の肖像画文学』（小川陽一、研文出版、二〇〇五）

③『中国日用類書集成』（酒井忠夫監修、坂出祥伸・小川陽一編、汲古書院、二〇〇四）

④『金雲翹伝』第一〇回及び第一一回（青心才人、『古本小説叢刊』第三輯、中華書局）

⑤『風俗金魚伝』（曲亭馬琴、大黒屋平吉・森屋治兵衛出版、江戸文政年間）

⑥『金雲翹』（竹内與之助、講談社、一九七五）

⑦『臨漢隱居詩話』（魏泰撰、『叢書集成新編』第七八冊、新文豊出版）では、「莫打鴨、打鴨恐驚鴛鴦飛」を「莫打鴨、打鴨驚鴛鴦」に作る。

トップページにもどる ▶